

最優秀賞

『大衆娯楽としてのパチンコを実現させるために
—実体験から課題・問題点を追求する—』

松村 優 様

関西学院大学 法学部法律学科 4年

・はじめに

パチンコと聞いて抱く印象は人それぞれ大きく異なる。ある人はパチンコを「息抜きとしての娯楽」と位置付け、またある人はパチンコを「ただのギャンブル」と位置付ける。パチンコが「日々の楽しみ」となっている人もいれば、パチンコに「人生を狂わされた」人もいる。このように人によって大きく捉え方の異なるパチンコ。不況の中、ユーザー数の減少という課題も突きつけられている今日、果たしてパチンコは「真の大衆娯楽」へとなれるのか。そのために我々にできることは何か。ここではそれを「私自身の実体験」と「友人との会話の中で」という2つの形式を通して検証していきたい。

<目次>

【私自身の実体験】

- ・パチンコを打ち始めるまで 2
- ・1パチとの出会い 2
- ・4パチの衝撃 2
- ・MAX台から見えてくるもの 3

【友人との会話の中で】

- ・パチンコ嫌いな友人M君との会話 4
- ・ネガティブな情報による支配 5
- ・ネット社会の影響力 6
- ・不安を取り除く 6

【おわりに】

【私自身の実体験】

・パチンコを打ち始めるまで

私が初めてパチンコを打ったのは2014年の9月。それまではパチンコ店に入ったことは無く、まさか自分がこの業界で働くことになるとは思いませんでした。しかし、偶然参加した企業の説明会がきっかけでこの業界に興味を抱き、パチンコという娯楽と出会うこととなった。いわば運命のようなものである。

それまでの私は周りにパチンコを楽しむ人がいなかったため、パチンコとは無縁の生活を送ってきた。大学の4年間は学業の他に、趣味である音楽鑑賞や読書、スポーツ観戦等を休みの日の楽しみとしていた。本当に暇で仕方がない日は一日中テレビを見て過ごしていた。いわばごく普通の大学生であった。

しかし、幼い頃からスポーツを習い続けてきた私は同時に「勝負事」が大好きであった。それはスポーツだけに限らず、オセロ・将棋・ゲーム等、ジャンルを問わずすべてに共通した。加えて、「スリル」を求める性格でもあったため、ホラー映画や海外旅行等、新しいモノには目がなかった。今から考えると「勝負事」と「スリル」を兼ねそろえた娯楽であるパチンコにハマる要素を、私は存分に持ち合わせた人間であった。

結局、人事の方と何度も話すうちに、心底この業界のことが好きになり、また企業理念にも強く共感したため、この業界で働くことを決意した。パチンコと全く無縁であった人間が、パチンコの将来を懸けて働くことになる。当初は若干の戸惑いもあったが、今日では「パチンコ遊戯の面白さ」「娯楽としてのパチンコという認識」を世に広めていきたいと切に願っている。日本の娯楽をより楽しく、多くの人々が幸せを享受できる空間を夢見て。

・1パチとの出会い

そんな中、私が初めて打ったパチンコ台は1パチのスーパー海物語。当時パチンコ初心者であった私からすると「海物語シリーズ」は街でよく見かけていたため、安心して打てるいわばパチンコの代名詞のようなものだった。そして実際に打ち始めると、スタート数50以内で大当たりを引いてしまった。結果3千玉以上獲得した私は、パチンコの味を占め、パチンコ道を駆け出した。

・4パチの衝撃

その後1か月くらい経つと、ほぼ全ての1パチ台を遊戯し終えた。時間つぶしにもなる上、ちょっとしたお小遣いにもなる。パチンコは私の生活の一部となりかけていた。そんなある時、ふと4パチコーナーに立ち寄った。「人々の目の色が違う」。それがこのコーナーに立ち寄った第一印象だった。ゆったり気楽に遊戯できる1パチと違い、4パチは4倍

2

お金の減りが早く、遊戯時間も短くなる。道理で真剣なわけだ。

殺気にも似た感覚を受けた私は、一瞬圧倒されながらも、4パチへの興味に突き動かされ、

戦国K I Z U N A台に座った。8千円があつという間に吹き飛んだ。正直面食らった。今から考えると大したことではないのだが、当時4パチ初挑戦の身であった私は「これじゃ大衆娯楽にはなれないな...」という感想を抱いた。その日は戸惑いながらもいそいそと帰宅の途に就いた。

1週間後、立ち直った私はリベンジを決意した。前回の反省を生かし予算は1パチの4倍用意した。台は再び戦国K I Z U N A。不安と期待のはざままで遊戯し、迎えた9千円目。やっと大当たり引くことができた。獲得玉数は4千玉と少し。当時の私からすると十分満足のいく結果であった。と、同時に劣勢を一気にひっくり返すことのできる4パチへの魅力を少しずつ感じ始めた。

・MAX台から見えてくるもの

4パチの遊戯スピードに慣れた私は11月。ついにMAX台に挑戦した。それまでは、あまりに低い大当たり確立のため敬遠していたが、MAX台の出玉数には以前から強く興味をそそられていた。そんな中迎えた11月某日。アニメで好きだったルパン三世の影響もあり、ルパン台で勝負することを決めた。結果はマイナス3万円。「怒り・悲しさ」といった感情よりは「情けなさ」が先行した。開始のゴングとともに強烈なカウンターパンチを食らう形となった私は、その後2週間、4パチの甘デジへと回避した。

しかし、MAX台の酸いも甘いも噛み分けたいと思っていた私は、数日後リングのMAX台に挑戦。すると投資額5千円目で大当たりを引き、その後18連鎖してしまった。「これがMAX台の爆発力か」と心の中でつぶやきながら、その日は笑顔で帰宅の途に就いた。

その後は今日に至るまで、専らMAX台を打ち続ける日々。時に笑い時に泣き、MAX台への挑戦を続けている。しかし、このMAX台。勝つにしろ負けるにしろ、動く金額が非常に大きい。まさに天国と地獄を内在した台と言える故、魅力的ではあるが相応の危険性も孕んでいる。パチンコ離れの一因となっている可能性もある。

だが、既存ユーザーからのこの台に対する人気は根強い。よって一概にこの台を削減することがパチンコを大衆娯楽へと推し進めるとは言い切れない。となると、やはり重要なのはMAX台のような低確率台でも安心して遊戯できる環境を作ること。「徹底した情報開示」「透明性のある経営」を実施・継続し、社会からの信頼を勝ち取ることが何より大切になってくるだろう。1円パチンコが世の中に普及し、ユーザーは遊び方の選択肢が増えた。これからも選択肢を削ることなく、安心して遊べる遊戯としてのパチンコを目指し邁進していきたい。

【友人との会話の中で】

ここでは友人M君との会話を通しパチンコの問題点や課題を探っていきたい。ちなみに

M君は当初、パチンコ遊戯経験は無く、この業界に対しても大きな不信感を抱いていた。それはいったい何が原因なのか。何故、パチンコを嫌うのか。その答えは身近なところにあった。(以下、M君の名前を「M」、彼の発言を太字で表記する)

・パチンコを嫌いな友人M君との会話

M「就職先決まったか？」

私「決まったよ」

M「業界は？」

私「パチンコ」

M「まじかよ...」

私「そのリアクションは...笑」

M「なんか怖いわ」

私「でも良い会社やったで。だからここで働くことを決めた」

M「ほんまに大丈夫なんか..？」

(この後さんざん心配され話題はパチンコ遊戯の話へ)

私「で、M。パチンコやったことあるん？」

M「あるわけないやろ！！」

私「なんで？」

M「そりゃ煙くさいし音うるさいし」

私「やってみたい気は？」

M「少しはあるけどやり方もわからんし何か怖いわ...」

私「俺も最近までしてなかったけど、あれめっちゃおもろいで！」

M「そうやって俺を沼に引き込むのか...」

私「いやいや。最近のパチンコ店は昔と違って安く長く遊べるんやで」

M「なんぼくらいで？」

私「1円パチンコなら2千円もあればうまくいけば1時間は遊べる」

M「ゲーセンみたいやな」

私「ほんまにな。1円パチンコはゆったり遊べるで」

M「4円は？」

私「4円は勝負の要素が強くなるからまずは1円からやろな」

M「へえー」

4

(後日、M君1円パチンコで3千円負ける)

M「負けたわ」

私「そういうこともある。感想は？」

M「まあ確かに面白かったわ。ただリーチで外しまくと腹立つな〜」

私「まあ当てな面白くないわな。笑 次回はしっかり当てに行こうぜ」

(後日、M君2ケース分玉を出すもすべて回収され3千円負ける)

M「当たったけどな...。また負けたわ」

私「まあ元気出せって」

(後日、元を取り返そうとしたM君は4円パチンコに挑戦するものの5千円負ける)

M「....」

私「もしもし」

M「....」

私「大丈夫か」

M「5千円が...あっという間に吹き飛んだ...」

私「4円はスピード早いやろ」

M「早すぎる。もうしばらく4円はやらん。パチンコとも離れる」

私「まあ元気出せって」

M「これが噂の遠隔か。やっぱ怖いわ」

私「そんなことは無いから安心しろって」

M「でもネットには遠隔遠隔って書いてあるやん」

私「ネットの情報なんか信じるなよ」

M「ネラーになりそう (※ネラーとは2chに書き込みをする人のことを指すようだ)」

M「もっと情報がほしいわ。パチンコ店のブログとかほとんどないやん」

M「疑いたくはないけど情報が少なすぎるとどうしても疑ってまう」

私「たしかにもっと情報ほしいよな (情報か...)」

この後、しばらくM君はパチンコから距離を置くものの、後に27000発の大当たりを記録するなどするうち、徐々にパチンコを「娯楽」として捉えられるようになっていく。そして今日では、すっかり彼の趣味の1つとなり、週に1度は最寄りのパチンコ店へ通うようになった。

・ネガティブな情報による支配

さて、ここで整理しておきたいのは、彼が当初パチンコに抱いていた印象である。振り

返ってみると「なんとなく怖い・騒音が気になる・たばこの煙が気になる・情報が少なすぎて不信感がある」等、パチンコを遊戯する以前に、多くのネガティブなイメージによっ

て彼は足止めを食らっていた。しかし、これらのネガティブな情報を一体彼はどこで仕入れたのか。

その答えはネットにあった。M君は、普段から何をするにしてもまず情報をネットから仕入れる習慣がある。いわば、自分の目で確かめる以前に、ネットからの情報によりフィルターがかけられてしまっている状態であった。加えて、ネットの情報（とりわけネガティブな情報）に対して、漠然とした信憑性を感じていたため、それが彼をパチンコ遊戯から遠ざける原因となっていた。

・ ネット社会の影響力

しかし、これはM君に限られる問題だろうか。いや、ネットが普及した今日においては誰もが対象となりうる問題である。パチンコユーザー減少の背景には、この「情報化社会」による負の側面も大きく影響しているように感じる。パチンコで検索をかけると「遠隔・詐欺・不正」といった言葉が上位にヒットする。その記事の内容に目を通すと、あらぬことばかり書かれているのだが、その情報に惑わされる閲覧者がいないとは言い切れない。むしろ、私の周りではネットの情報に影響を受けている友人が多くいる。

このネット等から発信されるネガティブな情報は、今後非ユーザーやネットに慣れた若年層の遊戯離れに影響を与えかねず、パチンコの大衆娯楽化へも大きな障害となる危険性がある。ただ、負ける人々がいる限り、ネットへのネガティブな書き込みはなくなるだろう。ではどうすればよいか。

・ 不安を取り除く

やはり第一には「徹底した情報開示」だろう。パチンコとはどのような遊戯で、どのような楽しみ方、またどのような危険性があるのかまで。企業自身が丁寧に情報を公開し、お客様が欲する情報にできる限り丁寧に答え続けていくこと。やはり、この積み重ね以外に真にお客様の抱く「漠然とした不信感や不安」を解消する手段は無いと思うと同時に、お客様のことを第一に思う真摯で丁寧な対応は、必ずや将来的にこの業界の飛躍に繋がっていくと信じている。

また、信頼を得るという意味では、不正をした店舗への罰則規定を強化する必要もあると感じる。たとえば、今日世界で楽しまれているカジノは、経営側のチェック体制の強化、罰則の厳罰化によって世間からの評判を徐々に高めていった。決して昔から、今のような輝かしい成功を収めていたわけではなく、経営側が自らに厳しい基準を設け、透明性のある経営を続けていく過程の中で、今日のカジノは作り上げられてきた。同じエンターテインメントを提供する業界として、参考になる点も多いだろう。吸収できる点は吸収してい

きたい。

【おわりに】

今回このエッセイでは「自分と他者」2つの視点から描くことに重点を置いた。また、データというよりは「体験」に重きを置き、非ユーザーがパチンコをどう思い、どのような経験をし、どう好きになっていくのか。その過程を細かく記述した。

取材に当たっては、10名の非ユーザーの方々へパチンコに対する印象を聞いて回った。そして、その中でも最もパチンコに否定的で、他9名の意見を集約する見解を持つ、M君との会話を代表して記述した。

また、このエッセイを書くにあたっては、私自身の遊戯ペースも週2から週5へと上げた。ほぼ毎日パチンコ漬けで、時に財布が悲鳴を上げることもあったが、この勝ったり負けたり繰り返しが性に合っているようで、楽しく経験を積み重ねることができた。

しかし、これから業界人となる私でさえ、時に不信感を募らせることもあった。信頼度80%とされる演出や非常に熱い保留で外してしまった際には、ネットの書き込みが脳裏をよぎることもあった。そして、そのたびに「絶対的な安心感がほしい」という切実な思いが胸にあふれた。

世の中には怪しげな攻略本が出回り、時にメディアでもギャンブルのような報道をされるパチンコ。依然、世間からの風当たりは強く、風評に悩まされる時期も短くないかもしれない。

しかし一方で、この娯楽はまだ潜在的に伸びる要素が多いとも感じる。一つに、食わず嫌いな潜在的ユーザーが多くいること。一つに、1円パチンコの登場により遊び方の幅が増えたこと。そしてもう一つに、必ずしも情報が多いとは言えない中で、今日までこれだけのユーザーを魅了し続けてきた遊戯であること。ここに「安心感」というピースをはめ込めば、この遊戯は大衆娯楽へとなれる素質を十分持ち合わせている。そう感じる。

暫くは大変な時期が続くかもしれないが、私たちが真にお客様の笑顔を思い務めていけば、いつか必ず世間は振り向いてくれる。そしてそのとき、真にパチンコは大衆娯楽として世間に認識されるのかもしれない。

【参考文献】

中条辰哉『日本カジノ戦略』（新潮新書）